

ぶどうとわたし

永澤 徹

ぶどうは人のこころを癒してくれる。ぶどうの畑は、訪れる人々をいつでもあたたかく迎えてくれる。ぶどうの畑に佇むと、ホッとする安らぎが、こころもからだもつつんでくれる。

人生の多感な頃、たいせつな節目の時、わたしは三度もぶどうと出会えた。この幸せは、誰に感謝をしたら良いのだろうか。

「ポォポォー」遠く汽笛が聞こえる。
「汽車だ！ 汽車がきた！」

耳聡い子供等は、それまで夢中だった遊びを放り出し、我れ先に背伸びして遠かな線路の彼方を見る。透明な陽炎のなかに、黒い煙と黒い機関車が、フワフワと揺れながら浮かび上がって、駆けてくる。やがて大きな汽笛とともに、目の前を轟々と走り抜け、また陽炎の中にゆらゆらと去って行く。

宮城県、海に近い伯母の家。家の前の、どこまでも続く線路に沿って、伯母一家が育てるぶどうの畑があった。

夏の強い陽差しが、ぶどう棚の葉や、まだ青い実に降りそそぐ。その下の、砂地の白い土には、葉っぱ形の白黒かげ模様がかっきりとついている。その密度の濃い日陰で、子供らも白黒模様に染まりなが

ら、ムシロを敷いて一日中遊ぶ。時折、乾いた涼しい風が吹き抜ける。

キビキビと働く姉さんかぶりの若い伯母。まわりには大勢のイトコたち。

母に連れられて行った、幼い夏の日の、懐かしい思い出。ぶどうとの初めての出会いでもあった。

30歳を過ぎてすぐの頃、思いがけない事故に遭った。身体を動かせない日々が、長く続いた。病室の白い壁さえも暗い洞穴に見えることがある、まったく辛い苦しい時期だった。

そんな或る日。もう夏も終わる頃。妻がぶどうを持ってきてくれた。嬉しかった。大好きなぶどうだが一家の主が働いていない状況では、自分から「食べたい」とは言い難くて遠慮していたものだ。だからほんとうに嬉しくて、ひと粒ひと粒、だいにだいに食べた。美味かった。万感のなかで味わった、こころに染み透るようなその味は、その後もずっと忘れていない。

北関東の小さな都市。単身赴任で働いていたある夏の日。

ぶどうが大好きというわたしに、新しい友人が、「い

いもの”を見せてやる、といった。

友人の運転ではんのちよいのドライブ。やがて視野いっぱい“いいもの”が飛び込んできた。夏の陽にキラキラと輝く緑の海かとみまがう、山のぶどう畑だった。

西向き、小高い、急峻な山肌一面に、たわわに実をつけたぶどうの樹々が、まるで筋肉質の手足を突っ張るかのようにへばりついている。

足場の悪い畑で、黙々と働く古武士のような面立ちの農夫達。若い農夫も中年の農夫も泰然と働いている。友人の説明で、彼らが知的障害を持つことを知って、驚いた。彼らの顔と、彼らが拓いた山のぶどう畑を交互に見ているうちに、深い感動に満たされた。

「私に人生と言えるものがあるなら」という名曲がある。私にとってのそれは、ぶどうとの出会いだった。人生の多感な頃、たいせつな節目に、三度もぶど

うと出会い、癒され、たすけられ、育てられた。

漸く50歳を超したいま、今後の人生はぶどうとともに在りたい、と希い、畑を拓いた。

私はいつからか古い友人達に「ルンルン」と呼ばれることがある。だから、ぶどう畑の名前は、ルンズファーム。

人々が、いつでも自由に集まって、働いたり、遊んだり、憩ったり。思い思いのひと時を思いのままに過ごせる……そんなぶどう畑にしたい。

宮城県の、伯母の家のぶどう畑は、いまはもう無い。でも伯母は今日も野良に出て元気に働いている。伯母は、今年100歳を超した。

人が、いつまでも働けるって素敵なこと。人が集まることって素敵なこと。このぶどう畑を中心にして、ぶどうと、みんなの輪と、自分を、一緒に育てていけたら、どんなに楽しいでしょうか……。

